

第13回運営指導委員会

1. 日時 平成27年7月13日 15:40～17:00 本校会議室
2. 参加者 河村洋諏訪東京理科大学学長（委員長）、村松久和信州大学教育学部教授、伏木久始信州大学教育学部教授、花岡清二セイコーエプソン株式会社相談役、井上英信濃毎日新聞社事業部長、矢崎和広諏訪圏学校理科教育振興基金理事長、今井正喜諏訪清陵会常務理事、金井繁昭教学指導課指導主事、服部靖之高校教育課主任指導主事、学校長、教頭等

3. 議題

《学校側から》

「新規 SSH 事業申請について、4 月以降、いろいろな方向性を学校をあげて検討してきたが、6 月に JST 主任調査員の視察と助言を受け検討した結果、事業を精選し公立中高一貫校として 6 年間を見通した探究的取組に特化した SSH 事業を検討することとした。学校設定科目の自由度を生かして、「SSH 探究」を生かし、さらに SSH 事業を深化させていくことを検討していく。具体的には、文理あわせた課題発見・課題解決的な学習を教育課程に位置づける。基本的な知識の習得の上に新たな課題を見つける能力をつけさせる教育課程を研究していく。今大学などで求められるのは課題発見力である。課題解決力のスキルを養う取組の研究は進んできたが、課題発見力の育成についてはさらに研究を深める必要がある。教科学習と課題探究をセットにし、知識の詰め込みならず、教科学習の中で自ら課題を見つけられるような授業の展開を研究する。ICT 機器の活用は授業の効率化のために利用し、その方策を大学と協同して開発する。なお、海外研修は中止し、地域の人材を活用した国際感覚を育成する取組に切換える。能動的学習の環境整備として ICT を整備し活用していく。また、SSH 事業を評価し、新たな事業に生かしていくシステムを構築する。新たな高大接続改革が検討されているなか、SSH 事業に積極的に取り組むことが本校にとって大切と考えている。」

《運営指導委員会からのご助言》

「中高一貫校としての特色を全面に出したらどうか。中高一貫のシステムとして中入生・高入生の位置づけなど、上手に考えていく必要がある。」「中間評価でも”総花的である”との指摘を受けていた。整理するにはよい時期か。」「報告書は実践報告書ではなく、成果と課題を明確にするよう。」「学校の課題は何か、課題改善のためどう取組んだかを明確にすること。生徒にどんな力をつけたいのか、それがそれぞれの事業でどう達成されたかを評価すべきである。評価アンケートについて、例えば、「自分で仮説をたて、解決することができたか」など、課題に対する項目を組み込む。それぞれの課題の評価が高まっていなかったとすれば、その原因は何か、何が課題なのかをさらに検討・改善していくべきである。」「今までの取り組みは盛りだくさん。生徒らは幸せかな、とも思うが・・・。もっとシンプルに、消化不良にならないように。」「民間にいた者としては、費用対効果をいちばんの価値基準としている。地域の特殊性が出てくれば目をひく。総花的にやっているものはダメ。出すなら斬新なものを。」「課題解決型学習には文理区別ない。日本の地盤沈下の原因は・・・。科学技術がダメ、社会学的にもダメ。これからの新しい人材を育てるならば双方とも育てないと。日本は技術で勝って、戦略で負けたといわれているので。」「対象となる生徒が限られていたことについては疑問だった。それなりに SSH の資産もできた。次のステップを目指してもよいか。やはり総花的になっていることが気になる。申請もしてみれば、くらの感覚で。」「軟着陸でなく、ここでもう一度ホップ・ステップ・ジャンプを。」「アクティブラーニングについては文系にも広げること。新しい教育は、SSH 採択の可否にかかわらずやっつけていかなければならない。」

第14回運営指導委員会

1. 日時 平成27年11月27日（金）13時30分より15時30分
2. 参加者 河村洋委員長、村松久和委員、伏木久始委員、花岡清二委員、井上英委員、矢崎和広委員、今井正喜委員、金井繁昭指導主事（オブザーバー）、学校長、教頭、SSH 担当教諭等
3. 議題 平成28年度スーパーサイエンスハイスクール事業について

《学校より》

「授業改善と課題探究をセットにして課題発見の取組を事業の柱に据える」「課題発見能力、自ら課題を

見つけてくる力が求められている。SSH 探究の取組で、課題解決のためのスキルは身に付いてきたが、さらに、日常的な授業を通じ、課題を発見する力を育みたい」

《運営指導委員会からのご助言》

〈申請書全般について〉

「一文が長すぎである。わかりやすい文章を。」「盛りだくさんで、とても1, 2年で成果の出せる内容ではない。本校が具体的にできること、身の丈にあったことの方がよ。」「もっとシャープな目標設定にしてください。」「方向性はよいと思うが……。盛りだくさんすぎる。絞ったほうがよい。やる気は感じるが、実際にできる目標を設定すること。しかも、目標は2, 3個に。」「まず育成すべき人物像があるのはよいが、そのすべてをSSH事業に取り組む必要はないだろう。SSHとして取り組みたいこと、焦点を絞るべきだろう。できること、やれることを書くこと。」「モノづくりの街、諏訪でこのような人物がほしいので、こんな人物を育てるSSH事業をする、そのためのカリキュラムを設定する。」「学校で行われるあらゆる教育活動の中で、特にSSHとして取り組みたいことは何かを明確に。」「キーワードの羅列では結果的に総花的で何を言っているのかわからない。清陵らしさを出しましょう。」

〈申請書内容について〉

「課題発見力を持った人材づくりこそ、いま日本が求められていることだ。新しくモノを作り出せる人材。大学のみならず日本全体で求められている。」「子供自身、自分が何を知りたいのか明確にでき、そして知への希求を通じ、見識を広げていく力をつけさせる。不思議だと思うアンテナ、感性を育てることを課題にして取組んでほしい。」「なぜ課題発見力を持った生徒を育てられないのか、現在の授業のあり方に問題があるのではないか。生徒の主体性を大切にしたい能動的な学習を進める必要がある。」「現在の申請書の目的と課題発見力育成が遠いように感じる。」「シンクローカル、アクトグローバルを大切な視点にしてください。」「多角的発想力、あらたなビジネスモデルを生み出すような独創的発想力。産業界にあって新しいモノを生み出すことはとても苦しいこと。清陵高校は変わっていてよい。偏屈な人間がいて……。それが存在価値。清陵高校が第4期で実施したいコアを明確にして申請書に書きませんか。」「他の学校との差別化・区別化を図るべき。もっとコンパクトに。」「モノづくり集積地諏訪を再生する人材を育成するための取組、ほかにまねができない人材養成について申請書にかけないか。」「最終的にはカリキュラム(結論)に落としがいかなければならない。どのようなカリキュラムを提供することによってどのような人材を育成すべきか、目標をしっかりと。」「伝統的な授業方法では育成できなかった課題発見能力の育成を図る。地元のものづくりを基盤としながらグローバル化を目指す。異文化とのコミュニケーションは新しいものを取り込むことにある。新しい教科の創造。新しいカリキュラム、総合的な教科、生徒が面白いがる教科。モノづくりの課題発見、発想の貧困さをブレイクスルーするような中高一貫校・総合的学習の時間の活用を検討してください。特別クラスだけでなく、生徒全員が履修する総合的な学習の時間の研究開発などを提案してほしい。」「ジャーナリストからの観点で見ると……。最近の社員(記者)も放っておくと何をしたいかわからない、という若手社員が多い。与えられたテーマでなく、自ら課題を発見し、解決できる人材養成は大切な視点であろう。」「諏訪清陵の教育と課題発見能力をどのように結び付けるか。それをうまく表現する。」「総花的でなく、諏訪清陵が第4期に思い切ってやりたいこと(勝負したい)こと力強く表現してほしい。」「先生方と生徒が大事に育ててきた学校を大切にしたいうえで、先生と生徒で新たなSSH事業のシンプルな明確な目標を設定してください。あまり今までの方針と変わらないように。地域の事情、課題を踏まえながら異文化を踏まえ、世界に目を向けた生徒を育成することを目指してほしい。」

〈評価について〉

「評価アンケートは、保護者に聞く内容、生徒に聞く内容、吟味して聞きましょう。適切な質問内容を検討しましょう。」「評価方法についてさらに検討を。例えば、ルービック評価のしかたについて、生徒は十分理解しているのか。中間評価において、8分間の発表について8項目の評価基準は多すぎ、煩雑です。じっくり発表が聞けない。3項目程度が妥当ではないか。発表の内容・表現のしかた・態度。そして、中間発表に対する評価は、自分にとって意義があったかどうか、自分の学びのプロセスをチェックさせるように指導してください。」「評価項目ごとに評価基準の表現を変える。評価基準5 4 3 2 1、自分にとってこの活動は、大変意義があった、やや意義があった、意味がなかった、まったく意味がなかったなどのように再検討しましょう。」「評価側が妥当で、答える側にとっても妥当な評価用紙を作成しましょう。」